

後記

本書は私と学生数人との共編によるものである。ただ、記載事項についての責任はすべて私にあるということで、すこしことごとしいが監修ということにした。

そこで具体的に仕事の分担と経過についてふれておくと、諸本の収輯、校合、および底本の決定など、すべて私が担当した。学生数人をもなつての松平文庫本「海東記」の写真撮影が、この仕事の最初で、それは昭和五十年七月であった。そしてその年の十月には書陵部や東大図書館などで校合に用いた写本や版本を閲覧し、善本があったら底本にと考えたが、結局しかるべき古写本をみつけることができず、その後の文献調査も思うにまかせず、流布本の群書類従本を底本として索引を作ることにした。そこで当初予定した「校本及び総索引」なる書名も、校本の仕事はさらに今後に残すという考えから「本文及び総索引」とした。

索引作成についての語認定の作業はすべて私が行なつた。底本の傍に歴史的仮名づかいで振仮名を施し、品詞名、掛詞、あるいは参照事項などの記入をしていった。索引づくりの面倒さは、その語認定にしがたがってカードを作り、例文を記して草稿を作るまでの作業にあるが、その煩わしい仕事には、熊本女子大学国文学科の左の十人の学生があつた。岡本校美子、加藤節子、小原節子、下村久美子、図師久子、長野伸子、畑中しげ子、浜崎弘子、深山路子、福島永子の諸君である。

研究室のストーブを囲みながら始めたカードづくりも、やがて研究室だけでなく、各自持ち帰つての作業となり、その草稿が集まる頃はもう夏休みであった。集まつた草稿の一枚に、蚊が押葉のように平たくなつて挟つていたのが、学生諸君の奮闘のあとがしのばれ、印象的であつた。その草稿に目をおし、さらに清書にも目を通して手を加

えて作成した索引である。そして今、校正をするのは仕事を始めて三度目の夏であるが、それには高原昭子、藤原京子の両君も手伝ってくれた。

このように十分注意をし、何度も目を通して作成したものであるが、なお思わぬ遺漏があるかもしれない。大方の御教示が頂ければ幸である。

なお本文の校異の調査について、対校本の使用を許可下さった宮内庁書陵部、東京大学附属図書館、および松平文庫の島原公民館に深く感謝申し上げます。

最後に本書の出版をこころよくお引き受け下さった笠間書院主、池田猛雄氏に厚くお礼申し上げます。

江口正弘